

## Part 10

### 十勝の農作物の現状

#### スライド 69

このグラフは、各種の畑作物について、全国の栽培面積に対する北海道と十勝での栽培面積の割合を示したものです。

十勝における小麦の栽培面積は全国の栽培面積の 35%、以下、馬鈴しょは 45%、甜菜は 44%、大豆は 24%、小豆は 61%、インゲン豆は 75%を占めています。畑作において十勝は全国 1 の生産基地となっています。

#### スライド 70

十勝の農作物は全栽培面積のうちの 45%を畑作 4 品目が占め、25%が牧草、15%がその他となっています。

注目すべき点は小麦の栽培面積が他の畑作物の 2 倍以上になっており、そのため輪作体系が崩れ始めていることです。

#### スライド 71

十勝における畑作は輪作で行われています。輪作は一般に小麦、甜菜、豆類、馬鈴しょの順番で行われ、馬鈴しょ収穫の後には、その年の秋に小麦の播種が行われます。小麦収穫の後にはしばらく時間がありますので、その間に緑肥などの栽培や石灰・堆肥の投入などの地力培養が行われます。

輪作は病害虫の発生を抑止する、雑草を減らす、畑作業のピークをずらす、土壌肥沃度を維持する、収量の低下を防止する、収量変動のリスクを回避するなど、重要な意義を持っています。

#### スライド 72

この図は十勝管内における主要作物の栽培面積の推移を示したものです。小麦の栽培面積は 1970 年頃から現在にかけて飛躍的に増大しています。

日本における小麦の生産は、アメリカとの MSA 協定に基づくアメリカ余剰農産物の輸入に伴い、1970 年初頭には過去最低レベルに陥っていました。しかし、1970 年以降、政府が食料自給率の向上のため国内産小麦の価格保証と買取制度を始めたことから再び増大し始めました。

しかし低く設定された政府買入価格の下で利益を上げるためには大面積で生産費を抑えた栽培をしなくてはならないことと、十勝の乾燥した気候が小麦栽培に適していたことから、十勝での小麦栽培面積が著しく増大したものです。

また、北海道での栽培に適した小麦の品種が、ホロシリ、チホク、ホクシン、きたほなみと次々に育成されたことも小麦生産の増大を後押ししました。

甜菜の栽培も輪作体系の中で不可欠なことから 1960 年以降増大してきました。ペーパーポット栽培などの革新的な栽培技術も甜菜の生産を増大させました。しかし、てん菜の栽培面積は、国の政策で生産量の上限が定められるようになったため減少が続いています。

馬鈴しょの栽培面積はほぼ横ばいで経過しています。これも十勝の土地と気候が馬鈴しょ栽培に適していることと、加工食品産業からの需要が維持されているためと考えられます。

大豆は 1960 年頃まで最大の栽培面積を誇っていましたが、アメリカからの大豆輸入の増大に伴い、十勝での栽培面積は激減しました。しかし、近年は国産大豆の食味や品質が評価され、生産は持ち直す傾向にあります。

十勝産の小豆は、他の地域や外国で生産されたものでは太刀打ちできない高品質を持っているため、大きく減少することなく生産されています。

### スライド 73

この図は十勝管内における甜菜と馬鈴しょの反収(10 アールあたりの収量)の推移を示したものです。

いずれの作物も 1960 年から 1980 年にかけての反収の増加が著しく、この時期の土地改良、品種改良、農業技術の発展が著しかったことを示しています。

#### スライド 74

この図は十勝管内における小麦と大豆と小豆の反収の推移を示したものです。甜菜や馬鈴しょと同様に小麦は 1970 年から 1990 年にかけて反収が著しく増大しましたが、これには品種改良の効果が大きいと思います。また小麦の反収は冷害年における落ち込みが著しいことがわかります。このグラフの範囲内では、1993 年、2010 年、2016 年が平均気温の低下や日照時間の減少などを伴う冷害年でした。

小豆の反収は 1980 年代に著しく増大しましたが、これには 1983 年におこなわれたエリモ小豆の導入の効果が大きいと思われます。

小豆は冷害年における収量の低下が著しく、1964 年、1966 年、1971 年、1976 年、1983 年、1993 年の大冷害年には収穫が皆無になっています。

豆類の反収は 2001 年と 2003 年にも減少していますが、これらの年の気象の記録を見ると、平均気温が低く、日照時間が短いという傾向がありました。

#### スライド 75

この表は 2024 年における十勝管内での畑作物の生産額を示したものです。麦類の生産額が 356 億円と最も大きくなっています。このことから小麦が栽培面積も産出額も最も大きい作物になったことがわかります。

馬鈴しょの生産額はこれに次いで 326 億円でした。これも十勝の馬鈴しょのブランド力と高い需要に支えられたものと思います。

以下は甜菜 282 億円、野菜 257 億円、豆類・雑穀 251 億円の順でした。

畑作物全体で 1476 億円となり、これは農産物全体の生産額の 39%を占めていました。

#### スライド 76

この図は 2024 年における耕種部門と畜産部門を含めた十勝の主な農産物の生産額をグラフにして示したものです。

畜産物の取扱高は畑作物の取扱高と比較して、非常に高いことが明らかです。しかし畜産の場合、設備投資など生産費の割合も高いので、そのことを考慮した比較も必要と思います。

#### スライド 77

この図は十勝管内における 1960 年以來の農業産出額の推移を示したものです。耕種部門と畜産部門の生産額は 2007 年頃から逆転し、畜産の生産額が急激に増大しています。

また耕種部門の生産額は異常気象の影響を受けやすいことが示されています。

なお 2007 年以降のデータは正確な産出額ではなく、農協取扱額に変わっています。これは統計調査をする国の人員が削減されたためです。

#### スライド 78

この図は十勝における農耕地面積と農家戸数の変遷を示したものです。

十勝における開拓は、晩成社による明治 16 年(1883 年)に始まり、北海道国有未開地処分法に基づく本土からの移住者による開拓が明治 30 年(1897 年)に始まりました。

それから、農地面積も農家戸数も増加し始め、太平洋戦争直前の 1940 年には 20 万 ha に達しました。農地面積は戦争中に 15 万 ha まで減少しましたが、その後再び増加し、1990 年頃にピークの 26 万 ha に達しました。その後はほぼ 25 万 ha で維持されています。

農家戸数は戦前と戦中に停滞していましたが、昭和 30 年(1954 年)頃に 2 万 3000 戸に達しました。

#### スライド 79

この図は最近 10 年間の十勝の専業農家戸数の減少傾向を示したものです。

畑作専業農家数は 2011 年の 2210 戸から、2020 年には 1900 戸に減少し、10 年間で 14 %の減少でした。

畑作野菜農家数は 2011 年の 1428 戸から、2020 年には 1296 戸に減少し、10 年間で 9 %の減少でした。

酪農専業農家数は 2011 年の 1176 戸から、2020 年には 944 戸に減少し、10 年間で 20 %の減少でした。

#### スライド 80

この図は最近 10 年間の十勝の 1 戸当たり経営面積の増加傾向を示したものです。

畑作専業農家の経営面積は 2011 年の 40.5 ha から、2020 年には 47.8 ha に増加し、18 %の増加でした。

畑作野菜農家の経営面積は 2011 年の 32.2 ha から、2020 年には 37.1 ha に増加し、15 %の増加でした。

酪農専業農家の経営面積は 2011 年の 52.6 ha から、2020 年には 62 ha に増加し、18 %の増加でした。

#### スライド 81

十勝で農業者人口が減少していることの原因としては以下のことが考えられます。

- ・ 畑作、酪農ともに大規模経営化が進行しています。  
これは農産物価格が低いので大規模化しないと利益を出しにくいからです。
- ・ 農業の機械化により、農作業の省力化され、必要な労働力が節減されたためです。また、農業機械への高額な設備投資を効率良く回収するためには、経営面積を拡大することが必要でした。
- ・ 小規模農地が統合され、農作業が合理化されました。
- ・ それに伴い、他の産業へ農業人口が流出しました。